

学内分断 懸念広がる

選考会議委員

「今後の改革期待」

新潟大の現学長の任期満了に伴う学長選考・監察会議で、前医学部長の染矢俊幸氏(67)が第17代学長に選出された。選考委員の判断材料の一つとなり、事前に投票資格を持つ教職員が投じた意向投票では次点だった染矢氏が、25日に行われた選考会議で逆転勝利した。これまでの学長選考では意向投票でトップの人が学長に選ばれることが多く、ねじれが生じる異例の事態に。副学長という立場で現執行部の一員である染矢氏が選考会議で信任を受け、学内の分断は必至だ。



新学長就任への課題と抱負を記者会見で語る染矢俊幸氏。25日夜、新潟市中央区

「意向投票で示された結果は、現体制への強い問題提起、そして大学の在り方に改革の必要性を突きつけたものだ」と真摯に受け止める。25日深夜、5時間超にわたって開かれた選考会議後の記者会見で染矢氏は表情を変えずこう切り出した。候補者面談などを行った会議は予定を2時間ほどオーバーしていた。

新潟大の学長選考はまず、学内約50人で構成する教育研究評議会と、学内外15人でつくる経営協議会

がそれぞれ候補者を推薦。教職員の意向投票が行われた後、県内の元会社社長やキャスターら学外5人と、学部をまとめる学系長や病院院長ら学内5人のうち候補者1人を除く計9人の学長選考・監察会議が選出した。

今回の学長選考では染矢氏のほかに、脳研究所長の小野寺理氏(63)と、理事で副学長の川端和重氏(69)が候補者となった。8月に行われた意向投票は投票率47・3%で、投票者数1515人のうち小野寺氏は882票、染矢氏は420票を獲得し、小野寺氏が2倍超の差を付けていた。

一体で頑張る機運が盛り上がり「ならない」と話す。新潟大の学長選考を巡っては、過去に意向投票と結果が異なり撤回を求める署名活動や、無効確認を求める訴訟が起きた例もある。

今回も選考に先立つて教職員有志が、意向投票の結果を重視するよう求める要望書を、選考会議に送っていた。染矢氏の選出を受け教職員有志は26日、抗議声明を発表。意向調査で大差が付いていた染矢氏が選ばれたことを「理解に苦しむ事態」とし、選考の改革への期待感を口にしていた。染矢氏は今後、文部科学相から任命を受け、来年2月に学長に就任する。まずは学内融和が最重要課題になりそうだ。ただ、出身母体の医学部票は意向調査でまとめられておらず、求心力で不安を残す。染矢氏は会見で「現場に向いて声を聞き、大学が抱える問題を共有したい」と話している。